

〈論文〉

香港における英語という選択

—広東語とのはざままで—

板垣 直美

Abstract Nowadays, the English language enjoys its hegemonic status as a lingua franca chosen by many. In Hong Kong, too, it remains significant even after the 1997 handover. However, the choice does not necessarily seem to be 'active'. Some choices might be against speakers' will due to their colonized or immigrant experiences. Linguistic choice leads to divisions such as economic inequality, social superiority / inferiority, and political inclusion / exclusion. Moreover, local languages and identity are endangered behind English hegemony.

This essay aims to explore how a colonized experience influences Hong Kong people's attitudes to the English language in the post-colonial context, covering 'diglossia', the complex interaction between language and society in Hong Kong.

Key words: diglossia, linguistic value and choice, linguistic imperialism, post-colonialism

1. はじめに

本稿では中国返還前後の香港社会を取り上げ、被植民地経験が香港人の英語に対する意識にどのような影響を与えているかを分析し考察する。その過程で、被験者は極めて限定的ではあるがアンケート調査を実施し、その回答に基づき香港人の「英語という選択」の実態を探ってみたい。

現代社会における英語はリンガ・フランカ(世界共通語)として、日々多くの人に「選ばれる」大言語であり、その覇権を誰もが認めるところである(Crystal 1997)。しかしその選択には「主体的な」自由意思に基づくものばかりでなく、「意に反した」自由意思によるものもあるのではないだろうか。もちろん明確に線引きできるものではないが、その違いを決定づける要因のひとつに国家や個人の被植民地経験や移民経験があるのではないかと考える(三浦他編 2000)。

たとえば、国家レベルでは 20 世紀半ばにアジア・アフリカ諸国が独立する際、英語が公用語の地位を獲得した事情には、英語を「主体的に」選んだというよりは多民族国家で各々の民族がわかり合える適当な共通語が存在しなかったために、中立を期してやむなく旧宗主国の言語をそのまま継承した国もあった(Crystal 1997)。

また個人レベルでは、英語の市場価値や表象価値から「主体的に」望む者がいる一方で、母語がなんらかの理由で否定されるが故に、「仕方なく」英語を選択せざるを得ない状況にある者もいる。選択する言語によって生じる話者の経済的格差、社会的地位の優劣、そして政治的包摂と排除の問題を抱える国が少なくない。さらに周縁的課題としてローカルな言語やアイデンティティーが抑圧される、ポストコロニアリズムの文脈が一般化した今日ならではの現象が顕在化している(三浦他編 2000)。

こうした現状を踏まえ、本稿では「ダイグロシヤ(diglossia)」という概念を軸に、香港人の英語の価値への認識、及び母語である広東語との関わりの中での英語の位置づけに焦点をあてる。

2. 背景 —ポストコロニアリズムとは—

言語の価値は決して平等ではない。19世紀後半欧州列強による帝国主義の時代に、宗主国が支配を正当化するため、言語間に序列をつけるイデオロギーが整備された。つまり高位言語としての宗主国言語には「近代性」や「普遍性」を、対して低位言語としての被支配国言語には「原始性」や「野蛮性」を投影させた。言語のもつ「表象価値」を巧みに利用したのである（カルヴェ 2000/ Romaine 2000）。

その後 20 世紀中盤に多くのアジア・アフリカ旧植民地諸国が独立したが、旧宗主国の言語が旧植民地の現地語を支配する「言語帝国主義」的構造が残る。すなわち国家の形成過程で、国語や公用語が現地語を周縁化あるいは劣位に追いやる状況が続いているのである（三浦他編 2000）。

ポストコロニアリズムとは、これまでの旧植民地と旧宗主国との関係を問い直し、西洋中心史観の中に沈んでいた非西洋社会の「人格」を浮上させ再評価する潮流にはかならない。中でもエドワード・サイードが提唱した「オリエンタリズム」理論¹⁾を軸とした、「西洋」と「非西洋」における権力関係の不均衡の言説は、言語においても無関係ではいられない。ただ残念ながら、「ポスト」コロニアル時代とは植民地主義の終焉を告げる時代を意味するのではなく、今なお植民地主義の負の遺産を背負っている時代でもある（上野他著 2000）。

その現代社会にあって英語は一部の人々に対して多くの利益をもたらすようになった。しかし「英語という選択」は言語のグローバル化やマクドナルド化²⁾を促すと同時に、「他の言語を選択しない」という結果を招き、やがて選ばれなかった言語の排除につながっていく。この一連のプロセスをロバート・フィリップソンは『言語帝国主義』の中で次のように述べている（1992 p.47）。

英語と他の言語とのあいだの構造的・文化的不平等の構築とたえまない再構築によって、英語の支配が打ち立てられ保持されること（三浦他編 2000 p.277/ 糟谷訳採用）。

ここで言う「帝国主義」とは、いわゆる前々世紀の軍事力などハードパワーで支配言語を押しつけるものではなく、ポストコロニアリズムの文脈では、英語に内蔵されたソフトパワー、すなわち英語そのものの価値や魅力で人々が自然と引きつけられるものである。見方を変えれば、英語の価値を人が自ら「主体的に」引き出すこととも言えるだろう。

3. 先行研究 —ダイグロシアとは—

だが植民地支配の歴史や言語の権力性に敏感になれば、必ずしも「主体的に」英語にアクセスしているものではないことに気づく（三浦他編 2000）。佐野直子は言語選択の難しさを

「選択する話者」とは・・・話者が完全な選択の自由をもつということではなく、さまざまな介入や圧力のもとで、ことばを常に選択させる/させられる、選択せざるをえない、ということでもあります・・・その選択によって人となりや他者との関係性を判断され、・・・時としてめんどろで、息苦しいものでもあるでしょう（2015 p.110）。

と評する。

たとえば中国返還前の香港に当てはめると、政府や学校など公的機関では英語が高位言語として使用され、一方家族や友人との会話には母語である広東語が低位言語として使用されていた。香港人にとっては英語を「選ぶ」ことが社会上昇のパスポートであっても、広東語は自らのアイデンティティーの印として簡単に捨てられるものではない。苦肉の策ではあるが両言語は「機能別に」棲み分けている。このように社会の場面によって支配言語と母語を使い分ける二言語併用社会を「ダイグロシア (diglossia)」といい、本稿のカギとなる (トラッドギル 2008)。

「ダイグロシア」の語源は、「2つの (di) ことば (glossia)」というギリシャ語で、もとは米国社会言語学者、チャールズ・ファーガソンによって導入された用語だ。定義は次の通りである (1959 pp.325-340 より筆者要約)。

共同体の中で1つの言語に2つの変種が機能別に共存する場合、ひとつは上位に置かれた「高位変種」(High Variety)となり、もうひとつは下位に置かれた「低位変種」(Low Variety)となる。「高位変種」は学校や職場で習得され、論理的で標準語化された上、公式な場面(教会・議会・講義・報道など)で使われる。一方「低位変種」は家庭で習得され、私的な場面(大衆文化・家族や友人との会話など)で用いられる。

その後、ファーガソンが同一言語の中の異なる変種間—標準語・古典語(H)と方言(L)など—における高低(H/L)の問題を扱ったのに対し、ジョシュア・フィッシュマンはポストコロニアル社会に広くみられる複数言語間—パラグアイでのスペイン語(H)とグアラニー語(L)など—までも「ダイグロシア」に含めた。またフィッシュマンは「バイリンガル」を個人の言語運用能力とみなし、対して「ダイグロシア」を社会全体の機能別バイリンガル状態とみなした (Fishman 1967/ Fasold 1997)。本稿ではフィッシュマンの定義に従う。

「ダイグロシア」の社会でもやはり「言語帝国主義」は影を落とす。すなわち社会の中で高位言語と低位言語の使用領域が異なる場合、低位言語は公的な場面で使用されないため次世代に継承されにくくなると共に、公的機関で使用される言語を知る階層と、そうでない階層の間に社会的かつ経済的格差が生じるからである。言語の共存に伴って生じた社会階層的上下関係では、言語能力が話者の間で不均衡なとき二言語使用を迫られるのは下位の者の方で、彼らは高位言語の運用能力において最初から不利な立場に置かれる。これが言語の社会的威信に差がある「ダイグロシア」の実態だ (三浦他編 2000/ カルヴェ 2000)。

この先とりあげる香港も例外ではない。香港は1842年から1997年までの156年間、主に英国の植民地として数々の影響を受けながら、中国本土とは異なる発展を遂げた。もちろん香港人全員が英語を話せるわけではなく(表1参照)「一定の階層」に限られるが、彼らには英語を受容しながらも母語との狭間で絶えず揺れる現状がある。本稿ではこの「一定の階層」、すなわち高低両語のリテラシーを持つバイリンガル・エリートを前提として、「香港(人)における英語」の議論を進めることをご了承頂きたい。

表 1. 香港社会の使用言語割合³⁾

| 調査年 | 1996 | 2016 |
|--------------------------|--------|--------|
| 調査年時の人口 ⁴⁾ | 644 万人 | 734 万人 |
| 英語使用者の割合 | 38.1% | 53.2% |
| 広東語使用者の割合 | 95.2% | 94.6% |
| 普通話 ⁵⁾ 使用者の割合 | 25.3% | 48.6% |

*複数言語の使用者がいるため、割合の合計は 100%とはならない。

4. 問題提起 —言語選択とは—

これまで「言語選択」に関する研究の多くでは、国語・公用語に対する現地語のせめぎ合い、という二項対立的議論が「言語帝国主義」論の文脈で交わされてきた。しかしその「選択の質」という視点からの考察は寡聞にして少ないように思われる。広東語は、話者数⁶⁾からして今すぐ消滅してしまう危機言語ではないが、三浦信孝(三浦他編 2000 pp.16-18)によれば、支配言語に負けないために少数言語が取る戦略には、①従属的同化、②抵抗による独立、③消極的共存、④積極的共存の4つが考えられるという。三浦はこのうち③を「ダイグロシア」とする。また三浦は③と④の違いは、少数言語が公用語としての地位を獲得しているかどうかだとして、④の事例にハイチの仏語とクレオール語を挙げている。言語が社会的威信を有するか、ひいてはその話者が権威を持つかどうかで言語の地位が決まる(Romaine 2000)。

返還後の香港の言語政策では、「読み書き」はこれまでどおり標準中国語と英語、他方で「話し言葉」は英語、広東語それに普通語を加えた「バイリテラシー、トリリンガリズム(両文三語)」を目指す。三語は一見対等に思えるが、広東語は政府から公用語の地位を与えられておらず(下記年表参照)、さらに現在の北京中央政府から見るとあくまで「方言」扱いなので「周辺化」された言語ということになる(Bolton 他編 2008/ テキスト 2009 Unit 2)。

こうした「ダイグロシア」下で言語選択の制約を受けながら、香港人は母語との関わりの中で、英語をどのような意識で選択しているか、その位置付けや動機付けを明らかにしたい。

香港のこれまで⁷⁾

- 1842. アヘン戦争後の南京条約で香港島が英国領に。英語が唯一の公用語になる。
- 1860. アロー戦争後、北京条約で九竜半島の先端部も英国領に。
- 1941. 日本の統治下に。
- 1945. 英国領に復帰。
- 1974. 英語に加えて中国語が公用語に制定される。
- 1984. 中英共同声明調印。中国への返還時期を決定し、中国が香港の高度な自治等を容認。
- 1997. 香港返還。「一国二制度」開始(～2047. 期限)。現在の言語政策施行。

5. 分析 —伊藤忠商事（香港）有限公司の事例から—

5.1. 対象と方法

香港人が英語に対してどのような意識や感情を抱いているか、かつ場面や相手との関係性ごとに母語とどちらを選ぶかを知ることで、「ダイグロシア」の実際に近づくことを目的としてアンケート調査を行った。調査は 2009 年に伊藤忠商事（香港）有限公司の社員 30 名（20 代/11 名・30 代/8 名・40 代/11 名）を対象とした。30 名は、いわゆる教養あるエリート⁸⁾である。10 年以上前の結果ではあるが、2009 年は返還後初世代⁹⁾に属し、まだ中国本土の政治や普通話の影響を今ほど受けておらず、調査対象に適していると考えられる。ただここでは詳しい要因までは踏み込まないが、人格・言語形成期において、返還前の英語中心の教育を受けた 40 代、返還後のインターネットが日常にあり、教授媒体として普通話が推奨され始めた 20 代、そしてその中間、旧帝国の残像の中で成人を迎えた 30 代では、結果に若干の影響があるかもしれない。

調査の全内容（附録参照）から本稿の目的にかなう設問のみを抽出した後、4 つの言語的価値—①機能価値、②交換価値、③表象価値、④記号価値¹⁰⁾—に分類し年代別に集計を行った。設問は全 25 問、まず香港人の英語のそれぞれの価値への認識を明らかにする質問を集め、次に広東語との比較における英語の位置づけを尋ねる設定にした。同時に被験者からは性別や年代等の個人情報、及び職場や家庭における言語環境を提供してもらった。

問い冒頭の番号とアルファベットは巻末にあるアンケート調査の設問番号に呼応する。問 3 の百分率の計算は「強く思う」と「思う」を 1 点とし、「強く思わない」「思わない」「不明」はカウントせず、合計点を年代別に人数で割った（小数第 3 位を四捨五入）。

5.2. 結果

① 機能価値

本項ではダイグロシアの定義と実際が、どの程度一致しているかを明らかにする目的で被験者の機能別言語使用に関する質問設定を試みた。結果は以下の通りである。

表 2 機能価値

| 番号 | 設 | 問 | 回答(%) | 20 代 | 30 代 | 40 代 |
|------|------------------------|-----------|-------|------|-------|-------|
| 1-f. | あなたはどのくらいの頻度で英語を使いますか？ | | | | | |
| | 読み書き | 頻繁/時々 | | 91/9 | 75/25 | 64/36 |
| | 話し言葉 | 頻繁/時々 | | 9/82 | 13/75 | 45/55 |
| 2-a. | あなたはいつ英語を使いますか？ | | | | | |
| | (公的場面) | 就業中 授業中 | | 91 | 100 | 100 |
| | (私的場面) | オフの時 夢の中で | | 9 | 50 | 27 |
| 2-b. | あなたはどこで英語を使いますか？ | | | | | |
| | (公的場面) | 職場 教室 | | 100 | 100 | 100 |
| | (私的場面) | 家庭 カフェ | | 0 | 38 | 45 |

| 番号 | 設 問 | 回答(%) | 20代 | 30代 | 40代 |
|------|------------------------------------|-------|-----|-----|-----|
| | 「家庭」を選ばなかった人は、家ではどんな言語を話しますか？ | | | | |
| | 広東語（福建語・普通話・英語との併用含む） | 100 | 88 | 91 | |
| 2-c. | あなたは誰と英語を使いますか？ | | | | |
| | （公的場面） 同僚 教師 | 91 | 88 | 100 | |
| | （私的場面） 家族 友人 ペット | 36 | 50 | 45 | |
| 2-d. | あなたはどんな話題で英語を使いますか？ | | | | |
| | （公的場面） 仕事 勉強 | 100 | 100 | 100 | |
| | （私的場面） 趣味/スポーツ 個人的なこと | 18 | 50 | 36 | |
| 2-e. | あなたはどんな目的で英語を使いますか？ | | | | |
| | コミュニケーション | 73 | 75 | 100 | |
| | リラックス | 0 | 13 | 0 | |
| 3-j | 英語は香港社会では 1997 年返還後も 高く評価されている。 | 82 | 100 | 82 | |
| 4-a. | 病気の時はどちらの言語話者に助けを求めますか？ | | | | |
| | 英語話者 | 0 | 13 | 0 | |
| | 広東語話者 | 100 | 88 | 73 | |
| 4-f. | 個人的なことを話す時はどちらの言語話者に話しますか？ | | | | |
| | 英語話者 | 0 | 25 | 0 | |
| | 広東語話者 | 36 | 63 | 55 | |

表 2 の結果を要約する。まず、いずれの年代の被験者も 7 割を超える割合で英語に対して「コミュニケーションツール」としての役割を求めている (2-e) ことから、香港では一定層の英語の機能的価値が十分認められる結果となった。次にその機能は公私で切り替えられるダイグロシア社会であることがよくわかる。なぜなら被験者の英語使用のほとんどが、時間的には「就業中・授業中」(2-a)、空間的には「職場・教室」(2-b)、さらに話し相手には「同僚」や「教師」(2-c)、話題は「仕事」や「勉強」(2-d) など「公的場面」であるからだ。対して「家庭」では広東語が好まれており (2-b)、「家族・友人」相手 (2-c) や「趣味等」(2-d)、「リラックス」(2-e) など「私的場面」での英語の使用は控えられている。また英語は話し言葉としてより、読み書き (高位機能) の手段として頻繁に使用されていることも窺えた (1-f)。逆に病気の時 (4-a)、個人的な話題 (4-f) など立ち入った場面では、広東語の使用頻度が高いことが認められた。

② 交換価値

本項では被験者から、英語の持つ経済や社会的優位性への認識を明らかにする目的で質問設定を試みた。結果は以下の通りである。

表 3 交換価値

| 番号 | 設 問 | 回答(%) | 20代 | 30代 | 40代 |
|------|---|-------|-----|-----|-----|
| 2-e. | あなたはどんな目的で英語を使いますか？ より良い生活を送るため/大学で学位を取るため | 29 | 13 | 36 | |
| 3-h. | 英語は将来自分がよりよい機会を得る手助けをしてくれるでしょう。 | 100 | 88 | 82 | |
| 4-b. | どちらの言語話者がより多く稼ぐでしょう？ | | | | |
| | 英語話者 | 55 | 25 | 18 | |
| | 広東語話者 | 0 | 0 | 9 | |
| 4-c. | どちらの言語話者の両親がより多く稼ぐでしょう？ | | | | |
| | 英語話者 | 45 | 38 | 18 | |
| | 広東語話者 | 0 | 0 | 9 | |
| 4-d. | どちらの言語話者が官職を得やすいでしょう？ | | | | |
| | 英語話者 | 55 | 38 | 36 | |
| | 広東語話者 | 0 | 13 | 9 | |

表 3 の結果を要約する。特に 20 代の被験者は全員が、英語の習得は自分たちの未来投資に役立つと確信し、期待が大きい (3-h)。その他 (4-b・4-c・4-d) は母語との比較において相対的に英語の経済、社会的優位性が示される程度にとどまった。

③ 表象価値

本項では被験者から、英語が象徴する意味への認識、及び自身の帰属先を求める言語を知る手がかりとなる質問設定を試みた。結果は以下の通りである。

表 4 表象価値

| 番号 | 設 問 | 回答(%) | 20代 | 30代 | 40代 |
|------|------------------------------|-------|-----|-----|-----|
| 3-a. | 流暢な英語はモダンで西洋風な気分になれるので習得したい。 | 73 | 63 | 55 | |
| 3-b. | 英語を流暢に話す人は概して教養や暮らし向きが良い。 | 90 | 63 | 55 | |
| 3-c. | 英語を流暢に話す人は概して鼻持ちならない見栄っ張り。 | 17 | 12 | 18 | |

| 番号 | 設 問 | 回答(%) | 20代 | 30代 | 40代 |
|------|---|-------|-----|-----|-----|
| 3-k. | 広東語は香港を最も代表する言語だ。 | 91 | 100 | 91 | |
| 3-l. | 自分自身を一番表現できるので広東語が好きだ。 | 82 | 63 | 73 | |
| 3-n. | コード・スイッチング ¹¹⁾ は中国文化と英国文化の対立、というよりは融合だと思う。 | 73 | 63 | 64 | |

表4の結果を要約する。どの年代からも英語のイメージへの肯定的な認識が確認され、特に20代は高い割合だった(3-a・3-b・3-c)。同時に母語への高い支持も認められた(3-k・3-l)。

④ 記号価値

本項では被験者から、英語の持つ「グローバル」なブランド性への受容度を計る質問設定を試みた。結果は以下の通りである。

表5 記号価値

| 番号 | 設 問 | 回答(%) | 20代 | 30代 | 40代 |
|------|---------------------------------------|-------|-----|-----|-----|
| 3-d. | 英語はアメリカのポピュラーカルチャーの言葉なので英語に親しんでいる。 | 27 | 13 | 55 | |
| 3-e. | 英語は以前植民地主義により押しつけられた言葉なので好きになれない。 | 9 | 0 | 9 | |
| 3-f. | 英語を使うとき非愛国的、罪悪感、または外国人と感じる。 | 9 | 12 | 0 | |
| 3-i. | 英語の使用は、今日の香港のグローバルな繁栄に貢献した最大の要因のひとつだ。 | 91 | 100 | 91 | |
| 4-e. | どちらの言語話者が多国籍企業の職を無理なく見つけられるでしょう？ | | | | |
| | 英語話者 | 91 | 100 | 73 | |
| | 広東語話者 | 0 | 0 | 9 | |

表5の結果を要約する。どの年代も英語のグローバルな記号価値を理解し(3-i)、否定的認識は低かった(3-e・3-f)。特筆すべきは、国際的な就労機会の可能性に対する認識において母語と大きく差がついたことである(4-e)。

6. 考察

6.1. 香港人にとっての英語

ここで再び第4章で提起された問題、すなわち香港ではどのように被植民地経験の影響を受け英語が選択され、母語との関係の中でどのような位置付けで共存するダイグロシア社会であるかを、調査結果と照らし合わせながら考察していく。調査対象となった被験者の階層や年代が限定的であるため、全体像を推察するには無理があるが、エリート層に限っての予測はある程度できるのではないかと考える。

①機能価値からは、まず被験者は公での英語の価値や地位、機能を理解しながらも(3-j)、母語である広東語への強い愛着を示した(4-a・4-f)。つまり「ダイグロシア」という機能的に分断されたスピーチコミュニティを香港エリートは巧みに使い分ける現実があり、「主体的な」英語と広東語の棲み分けが窺われる。

ただ大橋理枝(滝浦他編 2017 p.112)が指摘するように、低位言語が標準書記言語として整備されていない場合、公的場面では使われにくいため次世代に継承されにくくなる、という観点から広東語の将来が懸念される(1-f)。

②交換価値からは、英語の優位性というよりは母語への評価の低さが際立つ結果となった。どの年代も英語を「好機」と捉えている(3-h)が、「収入」に直結するとは考えていないようだ(4-b)。それでも公共機関で就労するには高位言語を知っていることが前提となるため、4-dの20代被験者の5割超の肯定的な回答に、したたかな香港エリートの現実志向が感じられる。さらにグローバリズムを幼少期から体感している20代は、英語運用にたけた子の親世代には「ゆとり」を感じており、英語は次世代への資本連鎖を産み出すものとみなしているように思われる(4-c)。

2-eの数字が思ったより低いのは、質問方法に問題があったかもしれない。「より良い生活」の定義があいまいで、かつ、全員がすでに社会人である被験者にとって学位は調査段階での関心事でなくなっていることもあり得るからだ。

言語には通貨と同様に「価格」があり、消費者は市場価格の高い言語を習得することで特に就労環境で自分を優位に立たせることが可能となる。一方で商品価値がない弱小言語は、言語市場を去る運命にあるということだ(佐野 2015)。そのために元来アジア圏では、一般的に英語を教授媒体とする学校に子供を通わせることに熱心な親が多い。この現実からも英語の交換価値の高さが窺われる。逆に広東語の教育分野での「価格」の低さが人々に植え付けられると、母語の役割が将来にわたり限定的になる可能性が生じる。

③表象価値からは、若い年代ほど英語の象徴的意味に気づいていることが確認された(3-a・3-b)。サイードのオリエンタリズム理論で前述したが、西洋(言語)は「近代性」や「発展性」を表象している。さらに「知」や「富」と同一視されていること、そこに自らが属するためには英語が使えることが前提となるのである。

同時に、広東語がいかに彼らのコミュニティへの愛情やアイデンティティーの源泉となっているかも窺われる(3-k・3-l)。しかしだからと言って英語(話者)を否定することもない(3-c)。

そのせいかコード・スイッチングを、英国文化との「対立」というよりは「融合」だと20代は7割超が好意的に捉えている(3-n)。ところが、本設問での3、40代話者の6割強にとどまる回答からは、文化の雑種性に「悲観」してはいないものの、さほど「積極的に」認

めているわけでもなさそうで、西(洋)との出会いに東(洋)の主張も忘れないバランス感覚が窺われる。この点についてアンソン・チャンは、「香港は東と西の最高の文化をブレンドする能力でもって栄えてきた」(Bolton 他編 2008 p.475 筆者和訳)と述べる。

④記号価値からは、もはや一定層の香港人にとって、英語は帝国主義時代のレガシーといった感覚が薄れ(3-e・3-f)、むしろ未来につながる恩恵だと捉えられているように思われる。英語を活用することで海外に携わる職へのチャンスも認識しているが、逆に母語からグローバル価値を見いだせないところに広東語の将来性が危ぶまれる(4-e)。また、40代にはポピュラーカルチャーを通じた英語への親しみが支持され、抵抗が少ないように思われる(3-d)。

英語が今や「グローバル」、ひいては「リング・フランカ(世界共通語)」の記号と化していることに疑問の余地はない。一方でディズニーやマクドナルドなど、アメリカのポピュラーカルチャーによるグローバル文化の支配は、時に「文化帝国主義」と揶揄され(トムリンソン 1999)、英語という記号は「アメリカナイゼーション」を拡散するプレーヤーでもある。この点をチャン・ユン・インは「香港のパラドックスは、英語が香港のコロニアルな過去を表象すると同時に、グローバルな現在も表象していることだ」(Bolton 編 2004 p.113 筆者和訳)と指摘する。香港(人)の難しさをうまく表現しているが、たとえ歴史の偶然から押しつけられた言語だったとしても、これまで世界的金融拠点として香港を支え、これからも発展させていく成功への武器であることは多くが認めるところである(3-i)。

以上の結果を総合的に判断する。愛情の有無は別にして、あくまでツールとして必要な領域で英語を活用する一定層の香港人の姿勢は、むしろリー・D.C.S.の次の見解に近いように思われる。

香港人は言語選択において決して言語帝国主義の受動的な被害者とは言えず、むしろ主体的な現実主義者である(Bolton 他編 2008 p.454 筆者和訳)。

本来「ダイグロシア」という状態は、実際にダイグロシアの社会を経験した言語学者からは、支配/被支配言語の「共存」というよりは「対立」する状況に他ならない、という批判もある¹²⁾。つまりファーガソンの言う、言語間が安定して使い分けられるとする「静的」な見方に対して「動的」な見方だ。しかし「対立」があっても高位言語の機能と領域を侵害しない限りは、低位言語には生き残れる余地がある(三浦他編 2000)とすれば、この棲み分けは弱小言語には有効な生存戦略と言えるだろう。しかも本調査の結果からは、一定の階層における香港人は英語に対して領域ごとに「主体性」を発揮しながらも、広東語に対しては息をひそめるような「消極性」や、逆に極端な地位の主張は見られなかった。

6.2. 香港のこれから

最後にこの先の香港の言語事情を記しておきたい。これまで見てきたように社会の中で機能別に言語が使い分けられ、話者同士の関係性や話題によっても切り替えられる香港の言語事情は複雑で重層的である。近年の香港は中国本土の政治的支配と共に普通話の隆盛がすさまじいため、階層に限らず若者を中心に、「中国人ではなく香港人」だというジレン

マに陥ることが増えている¹³⁾。その揺らぎは普通話を使うか広東語を使うかという選択と密接につながってくる。なぜなら言語は話者のアイデンティティと深く結びついており、自分がどこに帰属するか、と同時にどこに帰属しないか、でもあるからだ (Romaine 2000)。

これまで見てきたように、香港エリートは英語を使うか広東語を使うかというジレンマを日常の中で経験している。ダイグロシアの定義そのままに公共の場では「威信」のある英語を駆使する一方で、家族や友人との会話を楽しむときは「親密性」のある広東語で応じてきた。アンケート調査にもあったように、広東語は彼らにとって自分たちが香港の一員であるという所在を示し、かつ本音を表現できる、なくてはならない存在である (Bolton 他編 2008)。たとえ旧宗主国から見ると広東語は「前近代的」な言語となり、オリエンタリズムの非対称性がそのまま、広東語を選択した場合の彼らの「価値」まで決めつけてしまう可能性があったとしても。

ところが近年の状況から、政治は普通話、経済は英語、家庭は広東語というような、「ダイグロシア」ならぬ「トリグロシア (triglossia/ 三言語併用社会)」へ発展する日もそう遠くはないように思う。かつてのように英語が自分たちのアイデンティティを脅かす存在ではなくなっている代わりに、今度は脅威となるほど近くなった大陸との関係を遠ざけてくれる役割を広東語が担っていくのだろうか。ライ・M・L はこれから描かれる言語地図においても「主体的な現実主義者である香港人は、自分たちの利益にとって最も賢明な選択をしていくのではないか」 (Bolton 他編 2008 p.454 筆者和訳) と予想している。

7. おわりに

言語選択には話者が自由に選択権を持つということではなく、さまざまな制約の中でその言葉を選ばざるを得ない場合もある。しかし被植民地経験を抱えながらも香港の英語の選択は、限定的な調査ではあるが、思ったほど悲観的でなく、うまく現実と向き合いながら母語とのバランスを取っていることが示された。同時に彼らの愛情があくまで広東語にあるとしたら、選ばれた英語の寂しさを思う。

今回は返還後第1世代 (1997-2026) が被験者となったが、今後できれば第2世代 (2027-2056) の再調査を実施してその変化を見てみたい。その時には普通話の影響がさらに拡大深化しているかもしれないし、「ダイグロシア」は「トリグロシア」へと変容を遂げているかもしれない。さらに、かつての支配/被支配言語の権力構造が、そのままポストコロニアル社会の文脈を生きる人々の生活や地位の格差に繋がる現状から、まずは英語への一極集中がもたらす他言語排除への関心の高まりに期待したい。

謝辞

本論で用いたアンケート調査では、30名の方に回答協力をして頂きました。フランシス・羅氏 (伊藤忠商事〈香港〉有限公司/ 秘書課勤務) は、研究の要となったアンケート調査の実施を快く引き受けてくださいました。共に学習を進めたリー・文英氏 (香港公開大学同級生/ 当時) には有益な議論をして頂きました。さらに2名の匿名査読者から頂いたご意見には多くの気づきを与えられ、本論を修正する上で大変有益でした。以上の皆様へここに改めて感謝の意を表します。

注

- 1) サイドによれば、西洋が東洋を表現するとき政治・経済的に不均衡な権力関係が生じ、結果として東洋に対する想像力がゆがめられるという。その前提には東洋人が西洋人より劣った存在であるという想定と、東洋へのステレオタイプの認識が存在する(本橋 2005)。
- 2) 米国社会学者、ジョージ・リッツァーにより提唱された。マックス・ヴェーバーの合理化理論に基礎を置き、ファーストフード原理が社会領域に影響を及ぼす過程を論じる。しばしば今日の単一グローバル化現象のたとえに用いられ、ここでは言語の均一化、英語への収斂を指す。(「マクドナルド化現象と日本」佛教大学国際シンポジウムパンフレット 2001)。
- 3) BBC News 2017.6.29 “Cantonese v Mandarin: When Hong Kong languages get political”
をもとに筆者作成 <https://www.bbc.com/news/world-asia-china-40406429> (2020.7.29 閲覧)。
- 4) 香港特別行政区政府統計處 香港人口趨勢 (2017年12月出版) *千の位を四捨五入。
<https://www.statistics.gov.hk/pub/B1120017042017XXXXB0100.pdf> (2020.7.29 閲覧)。
- 5) 北京語 (Mandarin) に基づく標準中国語には「書き言葉 (Standard Written Chinese)」と「話し言葉 (普通話/Putonghua)」がある。中国では「書き言葉」は基本的に標準中国語で統一されているが、「話し言葉」は地域によって異なる。香港でも「話し言葉」は広東語が主流だが、正式な「書き言葉」を持たず、標準中国語を使う (テキスト 2009 Unit 3)。
- 6) 5,500 万人。文部科学省ホームページ「世界の母語人口 (上位 20 言語)」
(出典元: The Penguin FACTFINDER 2005)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1379956.htm
(2020.9.26 閲覧)。
- 7) 朝日新聞 2020.6.30 朝刊『香港と「一国二制度」』(p.2)をもとに筆者作成。
- 8) 呼称に迷うが、ここでは便宜上「エリート」とする。根拠はアンケート調査の回答 1-d.30 人全員が日本を代表する総合商社香港支店の現地採用ホワイトカラーであること。かつ 1-e.30 人中半数が 0 歳から 3 歳で英語の習得を始める言語環境にあったことから。
- 9) 世代: 親から子、孫へと引き継がれるそれぞれの代のことで、普通約 30 年を 1 世代と数える (goo 辞書 <https://dictionary.goo.ne.jp/word/世代/> 2020.7.25 閲覧)。従ってこの場合 1997 年から 2026 年を第 1 世代と扱う。
- 10) ポストモダンの思想家、ジャン・ボードリヤールは商品価値を 4 つに分類した。たとえばペンは、書くという「機能価値」、3 本の鉛筆との「交換価値」、卒業式の贈答品という「表象価値」、そしてペンの種類は社会的地位を表す「記号価値」を有するという。それを言語価値の説明に転用したシュアの記述 (Tam 他編 2009 p.124) と、ライの文献附録 (Bolton 他編 2008 pp.478-482) からヒントを得て筆者が独自に設問展開した。
- 11) 会話の中で場面や感情に伴い、文章ごとに言語体系 (ここでは英語と広東語) が切り替わる言語現象のこと。ちなみに単語単位で切り替わる現象は「ミックス・コード」という (テキスト 2009 Unit5)。
- 12) オクシタン語のラフォン、クレオール語のプリュドン、カタルーニャ語のアラシルが、それぞれ被支配言語は支配言語のために消滅するか、機能と権利を回復するかの二者択一だと主張 (カルヴェ 2000)。
- 13) 東洋経済 2020.7.4 劉彦甫『香港の若者が「自分が中国人じゃないと思う訳』内、香港市民のアイデンティティ推移(グラフ出典元: 香港民意研究所) <https://tovokeyzai.net/articles/-/360771?page=2> (2020.12.27.閲覧)

文献

日本語図書

- 上野俊哉・毛利嘉孝著 2000 『カルチュラル・スタディーズ入門』 ちくま書房
 ルイ＝ジャン・カルヴェ (西山教行訳) 2000 『言語政策とは何か』 白水社
 佐野直子 2015 『社会言語学のまなざし』 三元社
 滝浦真人・佐藤良明編著 2017 『異言語との出会い—言葉を通して自他を知る—』
 放送大学教育振興会

- 田中春美・田中幸子編著 2015 『よくわかる社会言語学』 ミネルヴァ書房
 ジョン・トムリンソン (片岡信訳) 1999 『グローバリゼーション—文化帝国主義を超えて』
 青土社
 ピーター・トラッドギル (土屋滋訳) 2008 『言語と社会』 岩波書店
 三浦信孝・糟谷啓介編著 2000 『言語帝国主義とは何か』 藤原書店
 本橋哲也 2005 『ポストコロニアリズム』 岩波書店

英語図書

- Ashcroft, B., Griffiths, G. & Tiffin, H. 2005 *Post-Colonial Studies The Key Concepts* Routledge
 Bolton, K. ed. 2004 *Hong Kong English—Autonomy and creativity*
 Hong Kong University Press
 Bolton, K. & Yang, H. ed. 2008 *Language and Society in Hong Kong*
 Open University of Hong Kong Press
 Coulmas, Florian 2005 *Sociolinguistics —The Study of Speakers' Choices*
 Cambridge University Press
 Crystal David 1997 *English as a global language* Cambridge University
 Fasold, Ralph 1997 *The Sociolinguistics of Society: Introduction to sociolinguistics vol.1*
 Blackwell
 Phillipson, Robert 1992 *Linguistic Imperialism* Oxford University Press
 Romaine, Suzanne 2000 *Language in Society: An Introduction to Sociolinguistics*
 Oxford University
 Tam, K. K. ed. 2009 *Englishization in Asia—Language and Cultural Issues*
 Open University of Hong Kong Press

論文

- Ferguson, Charles 1959 Diglossia *Word* 15 pp.325-340.
 Fishman, Joshua A. 1967 Bilingualism with and without Diglossia; Diglossia with and
 without Bilingualism *Journal of Social Issues* vol.23 pp.29-38.

テキスト

- 通信講義 “Language and Society in Hong Kong” 2009 The Open University of Hong Kong
 *当講義プロジェクト課題 (The Use of English in Hong Kong) 内アンケートを本稿で部分活用。

附録

The Questionnaire on the use of English

November 2009

This questionnaire is used only for academic purpose. The confidentiality of the information you provide will never fail to be protected. Many thanks for your cooperation.

Please answer the following questions by filling in the blanks or by circling the correct letters (Choose one or more).

1. Personal information

- a. Age 10s 20s 30s 40s 50s 60s 70s
- b. Sex male female
- c. Place of birth Hong Kong mainland China others ()
- d. Occupation ()
- e. Linguistic career
Cantonese (years) English (years) Putonghua (years)
- f. How often do you use English?
writing/reading often sometimes rarely never
speaking often sometimes rarely never

2. a. When do you use English? office hour in class off time in a dream
- b. Where do you use English? workplace classroom home café
If you do not choose 'home', what language do you speak at home?
Cantonese Putonghua Hakka Chiuchow others ()
- c. With whom do you use English? colleague teachers family friends pets
- d. On what subject do you use English?
business studies hobbies/sports private matters
- e. For what purpose do you use English?
to communicate to relax to know the Western world to gain a better life
to gain the degree in college to gain access to a wider community
others ()

3. a. I wish to master fluent English because it makes me feel modern and Westernized.
strongly agree agree disagree strongly disagree don't know

- b. A person who speaks fluent English is generally educated and well-off.
strongly agree agree disagree strongly disagree don't know
- c. A person who speaks fluent English is generally snobbish and show-off.
strongly agree agree disagree strongly disagree don't know
- d. I am familiar with English because it is used in American popular culture.
strongly agree agree disagree strongly disagree don't know
- e. I dislike English because it is a language imposed by colonialism in the past.
strongly agree agree disagree strongly disagree don't know
- f. I feel unpatriotic, guilty or foreigner in using English.
strongly agree agree disagree strongly disagree don't know
- g. The status of Putonghua will soon be higher than that of English in Hong Kong.
strongly agree agree disagree strongly disagree don't know
- h. English will help me much in getting better opportunities in the future.
strongly agree agree disagree strongly disagree don't know
- i. The use of English is one of the most crucial factors which have contributed to Hong Kong's global prosperity today.
strongly agree agree disagree strongly disagree don't know
- j. English is highly regarded in Hong Kong society even after 1997.
strongly agree agree disagree strongly disagree don't know
- k. Cantonese is a language which represents Hong Kong most.
strongly agree agree disagree strongly disagree don't know
- l. I like Cantonese because it best represents me.
strongly agree agree disagree strongly disagree don't know
- m. I often use 'code-switching' because it is convenient for conversation.
strongly agree agree disagree strongly disagree don't know
- n. I think 'code-switching' is a fusion of Chinese culture and British culture rather than a conflict of the two cultures.
strongly agree agree disagree strongly disagree don't know

4. If your neighbours are an English speaker and a Cantonese speaker,
- a. To which speaker would you ask for help when you are sick?
English speaker Cantonese speaker don't know
 - b. Which speaker would earn more money?
English speaker Cantonese speaker don't know
 - c. Which speaker's parents would earn more money?
English speaker Cantonese speaker don't know
 - d. Which speaker is more likely to obtain bureaucratic employment?
English speaker Cantonese speaker don't know
 - e. Which speaker would find a job of multinational corporation more easily?
English speaker Cantonese speaker don't know
 - f. Which speaker would you like to talk to about personal things?
English speaker Cantonese speaker don't know

THANK YOU VERY MUCH INDEED!

Naomi Itagaki (板垣直美) The Open University of Hong Kong